

動

向

## 畿内晩期縄文文化時代研究の沿革

石野博信

一 本邦における縄文文化時代の編年的研究は松本彦七郎博士による宮城県宮戸島遺跡の分層的発掘にはじまり、爾来とくに山内清男氏によつて着々整備されつつあるが、近畿地方においてはどうかであらうか。

一般に畿内の縄文文化時代研究は考しくなく、晩期に関しても、特に畿内のそれをとりあげた論述は一つとしてない現状である。従つて各種論文での断片的論考や遺跡の報告を通じて畿内晩期縄文文化への関心を跡付けてゆきたい。

### 二

意識的に畿内晩期縄文文化の研究を志したものではなかつたが、猪狩忠英氏をはじめその遺物に注意したのは、あたかも坪井正五郎博士の死によつて終熄した明治期考古学の上に縄文文化の編年的研究が叫ばれてまもない大正十三年であつた。それは土地の好古家、橋本好太郎氏の土器片二個、石器一個の紹介にすぎぬもので

はあつたが、よくその弥生式土器との類似を指摘し、「此土器と弥生式土器との間に、截然とした製作上の区別を律せんよりも、むしろ両土器の間に多分に認められる手法上や特質上の類似に興味ある注意をひく」と喝破している。

この頃より畿内における総合的な縄文文化期の研究がみられはじめ、遺跡としては法隆寺・三輪等があげられて来ている。直良信夫氏の論考は縄文文化と弥生文化の関連を「北方系縄文土器」「南方系縄文土器」「類縄文土器」等の用語法で解いているごとく、特に晩期よりの変遷を述べるのではなしに、ただ畿内縄文文化の「弥生」性を強調しているにすぎない。これも今にいう縄文文化晩期と弥生文化前期の推移とつた場合、抽象的にすぎる論考のうちにも領けないではないが、大蔵山・北白川出土品を弥生文化との関連のうちに見ようとするのは性急にすぎよう。これはまた畿内における編年的研究が未熟であつた証左でもあらうか。

大正十五年（一九二六）八木博氏による数少い畿内の貝塚遺跡のうち的好例とされている日下貝塚の発見とその概報は、晩期研究にはじめて確かな資料を提供した。島田貞彦氏はその中で他の同期文化との比較はなされてはいないが、「土器主体は弥生式系統であるが、古拙さををびること、津雲貝塚に類似し、強く縄文的色彩あり」として疑問を提出しているのは卓見であらう。

昭和期に入ると縄文文化の編年研究に心血を注ぐ山内清男氏は、いわゆる亀ヶ岡式土器を論点として全地域にわたつて縄文文化晩期の究明にあたつてゐるが、「畿内以西には未だ亀ヶ岡式的な土器が証明されぬ」として、中山平次郎博士の阿高式文様と亀ヶ岡式との比較を批判し、文様よりは、むしろ磨消縄文という手法の側から

畿内以西の晩期土器の性格を規定し、「関西にこれ（亀ヶ岡式土器）に比較し得る土器が発見され、そしてこれが縄文式に伴ふならば、両地方縄文土器下限の比較は一層容易となるであらう」「しかし、亀ヶ岡式的なものを仲介としなくても、各地の縄文式土器型式の精査によつて同じ目的が達せられるであらう。」と将来への方向を提示している。そしてここに提示された問題の一半、すなわち亀ヶ岡式系統土器による問題解決は、日下・竹内・宮滝各遺跡の発見によつて一応の資料は整えられ、それによつて日下出土品をして亀ヶ岡式前半に比定し、畿内縄文文化終末もまた東北縄文文化終末と併行するといふ今に確認されつつある学説の論点を開いたのである。（この間、発見遺跡に関してはその小報があるのみ）

ここに澎湃として起つてくる終末期縄文文化の南進説・北進説、さらに各地域の同時現象としての捉え方等、さまざまな論争のうちに畿内には樋口清之氏によつて三輪の新しい資料が紹介された。そして、山内氏等によつて断片的に論考されるうちに、昭和十一年、はじめて畿内晩期遺跡の報告書——樋口清之「大和竹之内石器時代遺跡の研究」——が刊行されたのである。氏はここで畿内の他の晩期遺跡との関連を意識しつつ二類十二型に分け、各型式間の移りかわり、弥生式土器への変遷を考察している。すなわち、さきに山内氏の提示した土着土器——条痕土器の弥生性に注意してはいるが、やはり未だ決定的な考究は加えられていない。山内氏自身もこの問題には答えていないのである。そして、この竹内丙式土器に対して、畿内以西の縄文文化研究を系統的にはたして来た三森定男氏は「器型、施文手法などから津雲A式の第二の場合に関連し、それより派生発展せしめられたもの」と考え、さらに畿内において陸前

大洞A式に対比しうるものとして竹内・宮滝をあげている。ここで重要なことは、これをいきなり奥羽文化南漸資料としてではなく、「亀ヶ岡式文化に木工技術の盛行した事は是川遺跡に見得るのであるが、木工技術の盛行は必ずしも亀ヶ岡式文化にのみ見得るものではなく、大和唐古遺跡にも満喫しうるのである。宮滝の如き弥生式文化に接触した遺跡に於ける土器手法にその手法が受容されることの可能性は充分に首肯しうるのである」と、逆に弥生式的要素の注入を云い、問題を新にしていることである。特に結論をだしたのもでもなく、史料を整えての論考でもないが、従来の研究の片手落ちを指摘したものととしての意義が認められよう。

末永雅雄博士の橿原遺跡に関する中間概報<sup>⑭</sup>は、その資料が端的に紹介されているが、「関東以東北の縄文式土器や本州中部地方出土の縄文遺跡に類似するものもあり、——」と問題を示唆されるにとどまり、論考はなされていない。同じく梅原末治・藤岡謙二郎氏等による日下貝塚報告<sup>⑮</sup>でも、縄文文化末期の遺跡として随所に指摘されてはいるながら、「本遺跡の示す文化が土師器とのみの連関を保つて彼の大陸文化の影響下の我が金属器初期の文化段階たる盛期の弥生式土器と殆んど接触を示さない、（中略）惟うに縄文式土器文化はその本来の性格から金属器文化をうけいれる資格に於て欠ける所があつたのであらう」（一六四頁）といふごとき、今日の、否當時においてすら芽生えつつあつた考古学上の常識にも背いているのはやはり時代の差であらうか。

畿内の縄文後期から晩期にかけての遺物を出す「宮滝の遺跡」<sup>⑯</sup>は大戦中の出版ではあるが、遺跡そのものの質量の豊かさと共に、報告書の構成の上にも畿内晩期の資料不足を補つてあまりあるものが

ある。いわゆる宮滝式より宮滝晩期への推移様相(特に条痕文土器の)等、知りたいことは多いが、特に五二頁以降の註釈で試みられている文様変遷、周辺遺跡との関連等示唆に富むもので、畿内晩期縄文文化研究に一段階を劃す報告である。

戦後の混乱は考古学研究、そしてその一部分である畿内縄文文化晩期研究の上にも影響してか、昭和廿七年「吉胡貝塚」の報告<sup>①</sup>の中で山内氏等によって間接的に触れられるまでは、わずかに四条畷山遺跡の発見と略報があるのみである。その変遷過程の細論はないが「宮滝からは樫原にない磨消縄文上に「コブ」を有する土器を出しているが、これは関東東北の後期終末期の特徴であり、宮滝式の年代を暗示するものである」といつた山内氏の吉胡↓宮滝↓樫原の立論と略述(一一四頁註記)は、氏の最近の畿内縄文晩期文化への発言として注目されるべきものがある。これより先、昭和廿三年調査された滋賀里遺跡<sup>②</sup>は、小島俊次氏の丹治遺跡と共に、宮滝式と樫原式の間を埋める型式として重要視されているが、未だ報告書が公にされていないのは惜しい。

江坂輝弥氏の縄文文化末期の二大文化圏の設定と、中部・近畿地方をその重複圏として捉えようとする試み<sup>③</sup>も、実証性に乏しい嫌いがあり、また逆に小島氏の吉野川流域の群小遺跡の紹介もそのまま紹介に留ってしまったのは、畿内縄文晩期研究の趨勢からも惜しまれる。その他、縄文文化末期の華を咲かせた東北からの伊東信雄氏の遠望<sup>④</sup>、J. E. Kidder の試論も断片にすぎない。さらに、岡山県黒土遺跡に関連して触れる坪井清足氏の論考<sup>⑤</sup>、京都市深草谷口出土の新資料<sup>⑥</sup>と漸次整えられて来ているが、いまや畿内縄文文化晩期の研究は末永雅雄・酒詰仲男両先生等によって進められている樫原

遺跡の報告に集約されている観がある。

### 三

かくて畿内縄文文化晩期の研究は、必ずしも意欲的になされてきたとはいえないが、樫原遺跡、滋賀里遺跡の報告の刊行、畿内への文化伝播径路としての北陸晩期縄文文化の究明、さらには晩期粗製土器と弥生式前期土器——一般的には夜臼式を取囲む問題の検討等々、相俟つてやがてより豊かな資料に裏打ちされた総合的な考察も可能となつて来るであらう。

#### 註記

- ① 松本彦七郎「宮戸島里浜貝塚の分層的発掘成績」人類学雑誌三四ノ九、大正八年。  
尚、縄文文化の編年研究の推移については「日本考古学講座」二卷(河出書房、昭和三〇年)五二頁以降に岡本勇氏の概括がある。
- ② 猪狩忠英「大和宇陀郡三本松村大野石器時代遺跡について」考古学雑誌一四ノ四、大正一三年。
- ③ 森本六爾「大和に於ける史前の遺跡」(一)、(二)、(三)、考古学雑誌一四ノ一〇、大正一三年。  
直良信夫「近畿地方に於ける縄文土器の研究」考古学雑誌一六ノ六、一七ノ四、大正一五年、昭和三年。
- ④ 「北方よりの転住者は強力な四囲の生存競争に相遇して、固有の文化相を合成融和の文化へと変移させてしまった」という条。(三節)
- ⑤ 島田貞彦「河内国中河内郡日下発見の貝塚について」人類学雑誌四一ノ一二、大正一五年。
- ⑥ 山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文土器の終末」考古学一ノ三、昭和五年。

- ⑦ 中山平次郎「近畿縄文土器・関東弥生式土器」考古学雑誌一  
九ノ一、二〇ノ四、昭和五・六年。
- ⑧ 山内清男「縄文土器の終末」ドルメン一ノ六、昭和七年。  
喜田貞吉博士との「ミネルヴァ論争」(ミネルヴァ四〜七、  
昭和一年)を経て現在ではほぼ定説となつて来ている。
- ⑨ 末永雅雄「大和官滝遺跡の調査」人類学雑誌四六、昭和六年。  
発掘調査を紹介し、問題を示唆する程度の略報。
- 森本六爾「大和竹之内遺跡(覚書)」考古学四ノ七、昭和八  
年。
- ⑩ 星川徳次郎氏藏品について亀ヶ岡式との関連を考え、官滝  
・国府遺跡との対比のうちに、土器と石器とを考察しつつ、  
今後の問題を残している。
- ⑪ 概括は、大場磐雄「縄文土器論の過去及び現在」考古学雑誌  
二三ノ一、昭和八年。
- 八幡一郎「奥羽文化南漸資料」考古学一ノ一・二、昭和五年。  
山内清男・前掲書二(同時現象)
- ⑫ 大場氏は「日本古代文化の推移上から北漸説をとる」とす  
る。
- ⑬ 樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」大和考古学四・五、  
及び「大和石器時代研究」所収。
- ⑭ 島本一「大和に於ける縄文式土器」史前学雑誌六ノ四、昭和  
九年。
- ⑮ 山内清男「日本考古学の秩序」ミネルヴァ昭和一年。  
畿内にも大洞式系のあることを簡単に触れ、宮滝―大洞B  
式・日下・竹内―大洞BC式と比定す。
- ⑯ 三森定雄「先史時代の西部日本」下、(13)(14)「人類学・先史学  
講座」二、昭和十三年。
- ⑰ 末永雅雄「橿原聖地の考古学的調査」考古学雑誌二九ノ一〇  
昭和十四年。

- ⑱ 梅原末治「大阪府下に於ける史前遺跡の調査」其一、『大阪  
府史跡名勝天然記念物調査報告』十二冊、所収、昭和一七  
年。
- ⑲ 直良信夫「日下の貝塚」『近畿地方古代文化叢考』所収、昭  
和一八年。
- ⑳ 末永雅雄「官滝の遺跡」昭和一九年。
- ㉑ 文化財保護委員会「吉胡貝塚」埋蔵文化財発掘調査報告第一、  
昭和二七年。
- ㉒ 発見当時の文部省への謄写版刷報告、資料は枚方市長尾、片  
山長三氏が保管しておられる。
- ㉓ 坪井清足「滋賀県大津市滋賀里南遺跡」『日本考古学年報2』  
昭和二八年、略報(資料は京都大学考古学教室藏)
- ㉔ 小島俊次「吉野川流域の古文化について」『奈良県総合文化  
調査報告書』所収、昭和二九年。
- ㉕ 江坂輝弥「縄文文化の特質」史学二六ノ三・四、昭和二八  
年。
- ㉖ 註②参照。
- ㉗ 伊東信雄「考古学上からみた東北古代の文化」『東北史の新  
研究』所収、昭和三〇年。
- ㉘ J. E. Kidder「縄文文化編年試論」古代学三ノ三、昭和二九  
年。
- ㉙ 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」高島遺跡調査委  
員会、昭和三十一年。
- ㉚ 昭和三二年八月、京都市伏見区深草谷口町甘香園にて小川敏  
夫・宇佐晋一氏により発見さる。古代学研究会例会、青年考  
古学協議会京都都会等で史料は紹介されたが、未報。

(大学院学生)

畿内晩期縄文文化時代遺跡表 (遺跡名は便宜上仮称したものが多く、市町村名の旧称のままであるものも多い)

遺跡名	遺跡所在地	参考文献並びに資料所在
山階 杉沢	滋賀県坂田郡神照村大字山階 春照村大字杉沢	島田貞彦「有史以前の近江」 中川泉三, 考古学雑誌14の1 小林行雄, 考古学9の5
金屋 滋賀里南	大上郡東甲良村金屋 大津市滋賀里南	坪井清足「滋賀県大津市滋賀里南遺跡」日本考古学年報2
京大農学部 岡崎	京都市左京区北白川追分町 直良信夫	「近畿地方の縄文土器」近畿古文化叢考所収 「藤貞幹氏旧蔵の土器」人類学雑誌44の6
深草谷口 石見上里	伏見区深草谷口町甘香園 府乙訓郡大原野村石見上里	小川敏夫・宇佐晋一氏蔵
宮瀧 家	奈良県吉野郡中荘村宮瀧 小川村家	末永雅雄『宮瀧の遺跡』同「宮瀧遺跡」人類学雑誌46の15 小島俊次「吉野川流域の古文化について」
東平 袁漏	中箱字東平	『奈良県総合文化調査報告書』所収
君ヶ 平	オムロ 君ヶ平	
烧神 南国	国樺村烧神 南国樺	
井戸 本	野々口字井戸本	
丹治 三輪	吉野町丹治 磯城郡三輪町三輪	
唐古 竹之内	川東村唐古 北葛城郡竹之内村	樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」大和考古学4・5 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「唐古弥生式遺跡の研究」 樋口清之「大和竹内石器時代遺跡」大和国史会刊 「大和竹内遺跡発見の石器について」大和考古学4 森本六爾「大和竹之内遺跡」考古学4の7 櫻根栄一「大和竹之内発見の石器時代遺物」考古学雑誌26の10 岩井武夫「竹之内, 新沢の遺跡遺物」人類学雑誌36の5 島本一「大和国二上山麓一磯壁附近採集の石器一」同「再 び磯壁遺跡について」大和志4の3・4 松並尚夫「磯壁遺跡後報」大和志5の2
法隆寺	生駒郡斑鳩町法隆寺西里大寺	樋口清之「大和法隆寺村発見の縄文式土器」大和志4の5
大野	宇陀郡三本松村大野	猪狩忠英「大和宇陀郡三本松村大野の石器時代遺跡につ いて」考古学雑誌14の4
榎原 新沢	榎原市榎原 高市郡新沢	
阿古坂	大阪府箕面市半町阿古坂	島田福雄・佐藤正義「摂北に於ける新発見の縄文遺跡と二 ・三の弥生遺跡について」考古学雑誌25の2
岡山	北河内郡四条畷町岡山字更荒寺	枚方市長尾, 片山長三氏蔵 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」図版所収
日下	中河内郡孔舎衛村日下	島田貞彦「河内國中河内郡日下発見の貝塚について」 人類学雑誌41の12 藤岡謙二郎「中河内郡孔舎衛村日下遺跡」 大阪府史跡名勝天然記念物調査報告12冊 直良信夫「日下の貝塚」近畿古文化叢考所収
船橋 国府	尚, 附近の丘陵や枚岡市山畑・八尾市大竹よりも出土が伝えられている 柏原町安堂 大阪府庁・平安高校・泉大津高校等蔵 道明寺町国府 昭和32年夏の調査の際, 倉敷考古館鎌木義昌氏によつ て大洞A式系の朱彩土器片が注意された	
春木	岸和田市春木町八幡山砂丘	堅田直「堺市浜寺諏訪の森出土の弥生式土器」 考古学雑誌43の1
中谷	兵庫県豊岡市中谷	直良信夫「丹後・但馬・因幡の縄文土器片」 近畿古文化叢考所収
彌布ヶ森 猪名川	城崎郡日高村彌布字彌布ヶ森 尼崎市田能	日高小学校蔵 村川行弘氏蔵